

武漢事務所便り週間新聞記事報告 2010.09.04 - 2010.09.10 22号

2010年09月06日付け 「楚天都市新聞」より

武漢と台湾のプロジェクトが本日締結され、スーパーの中百は台湾に事務所を設置する予定

9月6日、台湾コンベンション産業代表団25人が武漢を訪れ、武漢コンベンション業界の代表と両地域のコンベンション産業合作覚書に調印し、武漢は、海峡兩岸企業経済合作契約(ECFA)以来、台湾のコンベンション産業団体が初めて訪問した内陸都市となった。

9月7日、武漢側は「機械電子博覧会」、「食品博覧会」、「農業博覧会」、「国際自動車展覧会」、「光電子博覧会」、「旅行博覧会及び旅行イベント」などの有名な展覧会を台湾コンベンション産業団体にアピールする。

武漢と台湾は合作覚書に調印した後、両地域のビジネスや展覧会の誘致について協力を展開し、それぞれの地域でプレゼンテーションを行い、コンベンションの催しやフォーラムなどを共に開催し、資源共有を目指す。

武漢・台湾間の食品流通を拡大するため、スーパーの中百は台湾に事業所を設置する意向である。ECFAが順調に進めば、来年にも実現する可能性が大きい。

2010年09月08日付け 「長江新聞」より

「黄鶴楼」茶葉会社が「中国の茶都」の復興に力を入れる

昨日、武漢黄鶴楼茶葉会社が中秋節ごろ、主に一般消費者をターゲットに、初の武漢産となる新商品ウーロン茶を発表した。来年には、0.5キロごとに50元から150元までの一般のお茶を続々出荷し、「より多くの武漢の人が武漢産のお茶を飲むことを期待している」ということが明らかになった。

黄鶴楼茶葉会社は2005年に設立され、今までの製品は主に中、高層消費者を狙っており、年間売上は5000万元に達している。当社は「15万ムー(1ムー=6.667アール。約1万ヘクタール)の茶畑及び100店舗のチェーン店を着々と開設し、一般消費者向けの茶葉の種類が全体の7割を占めるようにする予定だ」と話した。

漢口は歴史上「茶の港」と呼ばれるほど、全国における最大の茶の取引市場であった。19世紀末、中国の茶の輸出量は世界市場の86%を占めたことがあり、その6割は漢口からであった。近代中国の初めてのお茶の機械も漢口で使用開始され、イギリス商人、ロシア商人、華僑商人が漢口にて激しく争い、歴史上の伝説となった。